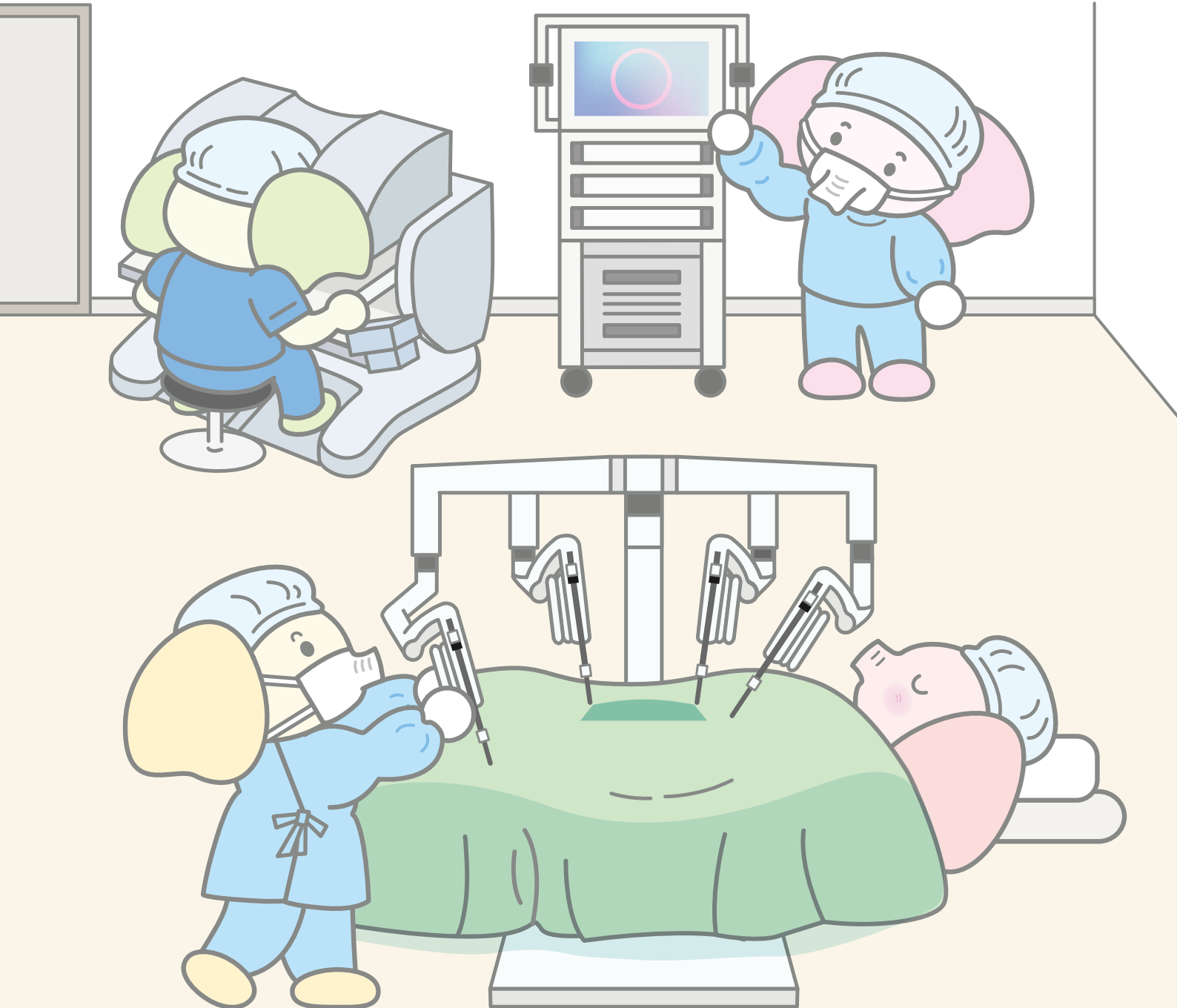




# ぞうさん広場 Vol. 37

## 特集 腹部ヘルニアセンター・運動器外傷再建センター



地方独立行政法人 堺市立病院機構

### 堺市立総合医療センター

SAKAI SAKAI CITY MEDICAL CENTER

# 腹部ヘルニアセンター

～ 手術の痛みと再発を最小限に抑えるために ～



センター長

**内藤 敦**

(大腸肛門外科 副部長)

消化器外科の医師がそれぞれの医療技術で行っていた腹部ヘルニアの治療方針を一元化する新組織として、2025年8月、腹部ヘルニアセンターを開設しました。



## 腹部ヘルニアセンター開設の目的

腹部ヘルニアセンターを開設した目的は2つあります。1つはヘルニア患者を受け入れる窓口を一本化して利便性を高めること、もう1つは治療の専門性を高めることです。

中には解剖学的にややこしい場所のヘルニアもあり、実は奥が深い分野ですが、ほとんどの病院にヘルニア専門の医師はいません。臓器ごとに細分化している消化器外科の医師が、それぞれの専門分野での手術をしています。ヘルニアの患者さんが来院すると、各自の考えで手術をしているのが一般的です。そのため医師によって術式が異なっています。

当院ではその課題を解消して、より正確で高度な治療を患者さんに提供するため、窓口を1つにして治療法を統一する腹部ヘルニアセンターを開設しました。

ヘルニア専門のセンターを開設したことで、院内ではヘルニアへの対応がスムーズになり、当院がヘルニアの治療をしていることが患者さんにも伝わりやすくなりました。

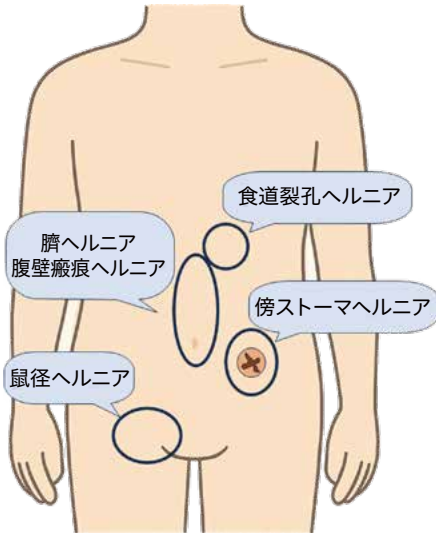
## 腹部ヘルニアってどんな病気？

腹部ヘルニアには、鼠径(そけい)ヘルニア、臍(へそ)ヘルニア、腹壁癒痕(はんこん)ヘルニア、癒痕ヘルニアの一種である白線ヘルニア、手術の傷あとにできる傍(ぼう)ストーマヘルニア、食道裂孔ヘルニアなどがありますが、患者さんの約90%は鼠径ヘルニアです。

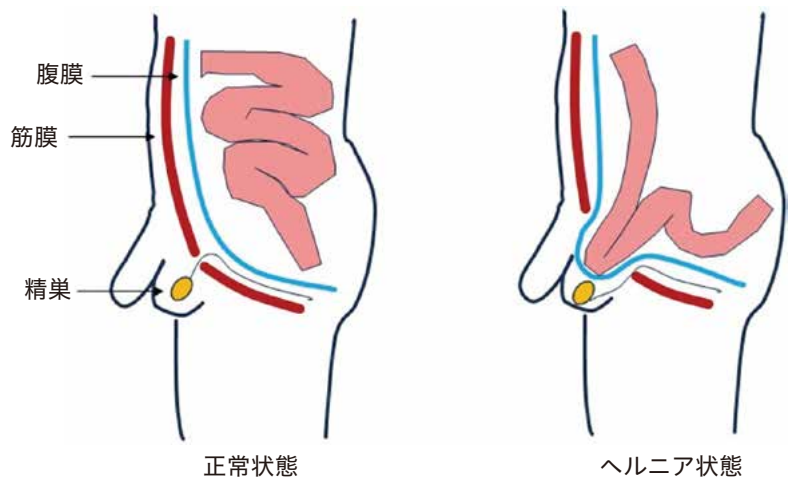
ヘルニアという症状は、お腹の筋肉のすき間(筋膜の欠けた部分)から内臓や脂肪が飛び出す状態のことで、手術しか治す方法はありません。

## 患者さんの男女比は85:15

患者さんの大半は高齢の男性です。年齢を重ね、お腹の壁が弱くなってくることが一番の原因なので、高齢化が進んでいる日本では増加傾向にあります。ヘルニアの原因としては加齢のほかに、腹圧上昇(咳、便秘)、喫煙、肥満、痩せ過ぎなども指摘されています。高齢者は高血圧や心臓病、糖尿病など複数の持病を持っている方が多く、手術が難しいケースもありますが、麻酔が可能な体の状態であれば手術は可能です。



代表的な腹部ヘルニアの種類



鼠径ヘルニアの模式図

「痛みなどの自覚症状がないけれども、なんとなく不安なので診てほしい」と言って来院される方や、内科や外科の他、泌尿器科や婦人科からの紹介状を持って来られる患者さんもいます。

命に直結する病気ではないので、症状によってはすぐに手術をせずに、治療方針を説明して患者さんと一緒に考えていく場合もあります。

## 体の状態や年齢を考慮して 治療法を選択

手術では、飛び出した臓器を元の位置に戻し、ふくろ状になった部分を切除します。そのうえで、弱くなった部分を補強するために医療用のやわらかい網状のシートを当てて、腹膜を閉じます。若い方では、このシートを使わず、縫い合わせるだけで治療できるケースもあります。

鼠径ヘルニアの手術は、従来は鼠径部切開法で行われていましたが、現在はお腹に小さな穴を開けてカメラで行う腹腔鏡手術が主流となりました。

最近注目されているのがロボット支援手術です。当院もすでに導入しており、鼠径部切開法も含めて、患者さんの年齢、体の状態、ヘルニアの種類などを見極めて、適切な術式を患者さんに提案しています。

## 体への負担が少ない ロボット支援手術

ロボット支援手術は、患部と手術によってできた創部が離れているため痛みも少なく、翌日には帰ることができます。若い方は日帰りも可能です。こうした利点から、近い将来はロボット支援手術がメインになっていくものと思われます。ロボット支援手術はこれまで胃がん、膵がん、結腸がんなど6つのがん保険が適用されてきました。現在のところヘルニアは保険適用外ですが、当院では、2025年12月より院内倫理審査の承認を得て自由診療という形で実施しています。

## 専門センターの開設効果

従来は臓器別に医師のチームが分かれていたもので、他のチームの医師がヘルニアの手術をしても、どういう術式なのか、術後どんなフォローをしているのか、共有できていない状態でした。現在は腹部ヘルニアセンター内で同じ方向を向いて治療法を共有しているため、医師相互の理解が深まっており、確かな技術とていねいな診療で、安心と快適な生活の回復に向けて取り組んでいます。特にロボット支援手術を始めたことで、より低侵襲の治療が可能になっています。



ロボット支援手術

## 他科・多職種・地域の医療機関との連携を大切に

多職種とのかかわりが最も多いのは術前の評価です。ヘルニアに限らず、術前検査は他科の医師や多職種も含めてダブルチェックをしています。複数の持病がある高齢者についても、当院には対応できる専門の科や多職種がそろっているため、術後の薬やりハビリも含めて、高い専門性を発揮し、知識と技術を総動員して院内で解決できます。こういう点が総合病院ならではの強みです。下腹部が膨らんでいるが、場所が場所だけに病院に行くのが恥ずかしいとか、病院に行って手術をされると言われたらどうしようとか悩んでいる方がいると思われそうですが、まずは気軽に相談に行くという感じで受診してください。

ヘルニアは地域のかかりつけ医に相談されたり、クリニックの先生の診断で見つかるケースが多いため、地域診療における初期対応と当院への紹介判断が重要になります。このため、地域の医療機関との連携を深め、「ヘルニアの治療なら堺市立総合医療センターの腹部ヘルニアセンターへ」と言われるように取り組みの充実をさらに進めていきます。



## 鼠径ヘルニア専門外来を開設

毎週月曜 14:00~16:30

患者さんの病態に合わせて、ロボット支援手術、腹腔鏡手術、鼠径部切開法などの適応を説明させていただきます。その他の腹部ヘルニアに関すること、患者さんのご都合や急ぎの場合などは、月～金の一般診で対応しております。

特集  
II

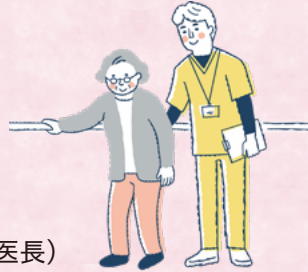
## 運動器外傷再建センター

～ “元の生活に戻る喜び”を支えるために～

センター長

川本 匡規

(救命救急科 医長、整形外科 医長)



外傷患者の命を救い、機能回復・社会復帰までを支える新組織として、2026年1月、効率的で質の高い医療を提供する運動器外傷再建センターを開設しました。



## 外傷治療の実績と社会的使命

当院は外傷再建治療の医療レベルが高く、経験も実績も豊富です。日本整形外傷学会、日本骨折治療学会の症例登録データによると、当院の実績は、**寛骨臼骨折\***の手術件数は2025年全国2位、皮膚を破って骨が飛び出す開放骨折の手術件数は全国4位です。また、年間救急搬送の受け入れは約1万件にもものぼっていて、そのうち外傷患者の受け入れは大阪市内平均の約3倍です。

堺・中河内・南河内の約215万人をカバーする三次救急の拠点病院として、一次救急、二次救急では治療が困難な外傷患者が多く搬送されてきます。大阪大学のドクターヘリが飛来することもあり、どのような状態の患者さんにも院内でほとんど対応できる体制が整っています。

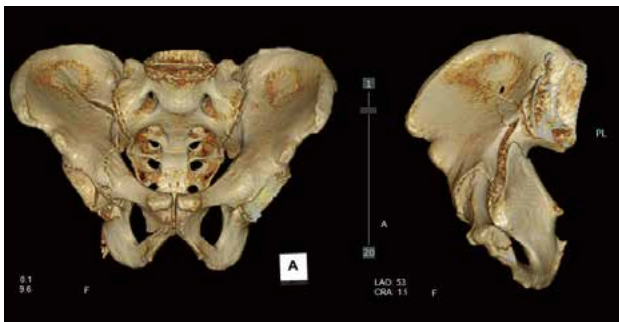
このような高度な再建医療を提供できる体制は全国的に見ても少なく、社会的使命を持っている病院です。

運動器外傷再建センター  
開設の背景

その外傷治療体制を強化するため、2026年1月、外傷治療を一手に担う運動器外傷再建センターを開設しました。従来は、救急車で搬送される患者さんは救命救急科で、かかりつけ医からの紹介や自分でやって来る患者さんは整形外科で治療していました。例えば手首を骨折した患者さんが救急車で来た場合は救命救急科が担当し、自分で

**※寛骨臼骨折とは：**股関節を形成する骨盤のカップ状の構造である寛骨臼の骨折を指します。この骨折は様々なパターンで発生し、寛骨臼の一部または複数の部位に発生する可能性があります。多くの場合、交通事故や高所からの転落など、高エネルギー外傷が原因となります。また、高齢者では骨粗鬆症などにより低エネルギーでも発生することがあります。骨折は寛骨臼の前方、後方、上部など様々な部位で起こり、場合によっては股関節脱臼を伴うこともあります。適切に治療されないと、関節変形を引き起こし、歩行障害をきたすため、正確な整復、強固な固定が必要です。

## ■ 事例1 (70歳代男性 右寛骨臼両柱骨折)



交通事故で受傷し、右寛骨臼両柱骨折の手術依頼で転送された。



手術時間 4時間25分 出血量 500ml  
完全に受傷前と同じ形まで整復できた。  
6か月後に原職復帰した。

来た場合は整形外科が担当していました。つまり同じ症状でも「どの窓口に来たか」によって、治療体制が分かっていたのです。

このように入り口で整形外科・救命救急科・形成外科などに担当を振り分けていた外傷治療を一元化して、センターで患者さんの体の状態を診てから、該当する科に振り分けするように改革したのが大きな変化です。このセンター誕生によって、効率よく治療体制を組めることになり、従来よりも手術が早くできる分、治りも早くなるという好循環が生まれています。

### 患者さんの年齢と外傷の傾向

若年・中年層は交通事故などで複数箇所にはがをしていく多発外傷の人が多いのが特徴です。腕が折れていて、しかも骨盤が折れ、足も折れているような状態です。それを一つひとつ治療していくこととなります。

これに対して、高齢の外傷患者は透析中や心臓病・糖尿病など複数の基礎疾患を有する方が多いため、手術前にまず内臓の疾患を診る必要があります。大腿骨骨折の患者さんの10%~20%は1年以内に亡くなっていますが、それは元々の内臓の病気が解決できていない状態で手術をしなくてはいけないことが原因です。

当センターでは、どのような病気があるのかを確認し、救命救急科が生命の危機を管理します。初期段階から整形外科医や内科医が評価を行い治療計画を立て、手術前に解決すべき問題を整理してから手術を行います。

これまでは、整形外科に入院した大腿部骨折の高齢者は、手術までに4、5日かかるケースもありましたが、センター開設後はその期間を短縮することができました。亡くなる可能性が高い人が亡くならないで済むかもしれないところまで、しっかり対応していくのが当センターの基本方針です。

### 機能回復・社会復帰 をめざす再建医療



若年・中年層には、治療期間が長くなるものの元の職場に戻ることを(原職復帰)を目標に、高齢者は寝たきりにならないように機能を回復させて元の生活に戻ること(社会復帰)を目標に、長期的な支援を行います。

ひと昔前であれば手・足を切断していた例でも、切断せずに原職復帰できる機能を残していくのが再建医療です。**開放骨折\***でも、感染に対応しながらぎりぎりまで切断せずに治すことを選択します。骨盤骨折や寛骨臼骨折に対応できる医師は全国的に見ても少なく、その意味でも当院の医療レベルは高く評価されています。

大阪大学からドクターヘリで搬送されてきたある患者さんも、切断せずに血管と筋肉をつなぐ再建治療を行った結果、現在、復帰をめざしてがんばっています。

患者さんは、急性期治療(約1か月)ののち、回復期リハビリ病院に転院して2~3か月の治療を経て、その後は当院の外来で経過を確認していきます。

### 多職種でのチーム医療と 地域連携

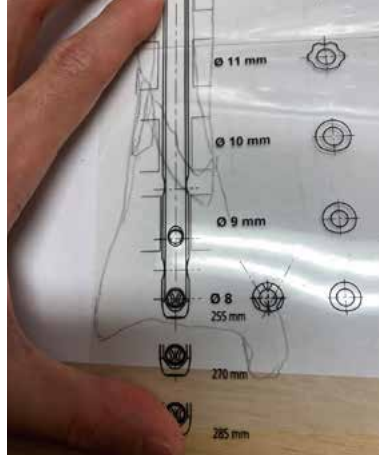
当院には看護師やリハビリスタッフを含むさまざまな職種の専門家がそろっており、外傷再建医療にとってチーム医療が重要な役割を果たしています。

一例ですが、周囲のサポートが届きにくい環境にある人が自発的な移動動作の際に転倒して骨折した人、栄養状態が悪い状態で骨折した人、自暴自棄になって自傷でけがをした人など、社会的配慮が必要な方が比較的多く見ら

## ■ 事例 2 (60歳代男性 開放骨折)



開放骨折



手術計画(一部)



手術計画通りに完遂

**※開放骨折とは：**交通事故や高所からの転落、接触を伴うスポーツなど強い衝撃を受けることで生じます。骨折した骨が皮膚を突き破って外部に露出する重度の骨折の1つで、血管や神経、肺の損傷などのさまざまな合併症が生じる場合もあり、骨折部に細菌が侵入して感染を引き起こす恐れがあります。露出した骨が感染すると骨髄炎(こつずいえん)となる場合があります。骨髄炎を起こすと骨折部がなかなかくっつかなくなり、治りにくくなる“感染性偽関節”と呼ばれる状態になるため速やかな治療が求められます。

れます。そういう方には公的な制度を紹介したうえで転院・退院を支援する医療福祉系の職種がサポートします。三次救急を担っている当院は「堺市の救急医療の最終ライン」として、救急隊や他院から患者さんを多く受け入れています。受けたからにはしっかりと治療し、救急隊や紹介していただいた医療機関から「紹介してよかった」と言われるよう、スタッフ一人ひとりがその使命を自覚して医療サービスに取り組んでいます。

### スタッフ教育を進め選ばれる病院に

一人でも多くの患者さんを治療し、「元の生活に戻る喜び”を支えるために」という使命を全うし続けるには、医師・看護師・理学療法士などへのスタッフ教育が何より大切です。スタッフが入替わっても医療の質を落とさない教育を続けていかなければなりません。

また、新しい形の教育も必要です。看護師の例で言えば、生きるか死ぬかのところを診る救命救急科と、手足のリハビリを含めて診る整形外科とでは、看護師の役割が違います。通常、救命救急病棟で体の状態を整えて整形外科病棟に移りますが、今後は救命救急病棟で体の状態を整え

ながら整形外科の看護もできないかと考えています。そのため、救命救急病棟と整形外科病棟の実務リーダーの看護師が加わって、どういう形で交流しながら教育をしていくかを模索しているところです。

一方で、高度な医療を継続するためにスタッフのワークライフバランスにも配慮しています。

大阪大学関連病院とも連携しながら、10年後に、堺のみならず大阪全体での医療がもっとよくなっているための拠点病院という認識で教育を進めつつ、けがをしたときに最初に選ばれる病院、安心して任せいただける運動器外傷再建センターをめざして取り組みを進めています。



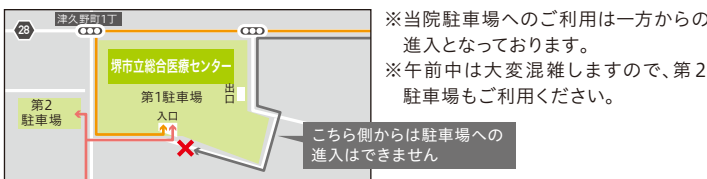


# 市民健康講座 開催報告

2025年10月25日、堺市立西文化会館ウェスティにて、市民健康講座「あなたと大切な人のために若いうちから知っておくべき乳がんのこと～早期発見が未来を変える～」を開催しました。山村医師が「乳がんの基礎知識とがんゲノム医療」について解説、続いて認定遺伝カウンセラーの好井看護師が「遺伝性乳がんを知ろう」と題して、遺伝に関する正しい理解の大切さをお伝えしました。最後に、乳がん看護認定看護師の濱口看護師が「セルフチェックの方法」や「当院の診療サポート体制」を紹介しました。講義後には、乳がん触診モデルで感触を確かめていただいたり、医師や看護師と直接お話しいただける「乳がんなんでも相談会」の時間を設けました。参加者からは「遺伝性乳がんやゲノム医療のことを知れて良かった」、「乳がんの原因やセルフチェック方法を知れ、日頃から気をつけるべき点がわかりやすくなった」との感想をいただきました。ご参加いただきありがとうございました。



## Access 交通のご案内



## 堺区・南区方面に送迎バスを運行中!

堺区ルート 19本/日 南区ルート 8本/日

**無料**  
※平日のみ

スマホから送迎バスの位置情報がわかるようになりました

※位置情報管理システムは、一定期間の試験運用を行い、継続運用すべきかを検討いたします

詳しくは、ホームページをご確認ください



### バスでお越しの方

中もず駅前、石津川駅前、深井駅、泉ヶ丘駅、若竹大橋、榎・美木多駅、堺東駅前

上記の南海バス停留所から、堺市立総合医療センター行きのバスをご利用ください

### 電車でお越しの方

JR阪和線津久野駅 徒歩約5分

### 車でお越しの方

阪和自動車道「堺IC」より10分

阪神高速道路15号堺線「堺出口」高架道を出口まで進み国道26号線より15分

### 駐車場料金のご案内

一般ご利用者(お見舞い等)	当日受診された方	手術付き添いの患者さんのご家族等
最初の1時間 <b>200円</b>	5時間まで <b>200円</b>	24時間まで <b>200円</b>
最初の30分以内に出庫の場合は無料。以降30分毎に100円		当日受診された障害者手帳をお持ちの方 <b>無料</b>



地方独立行政法人 堺市立病院機構

**堺市立総合医療センター**

SAKAI SAKAI CITY MEDICAL CENTER

〒593-8304 大阪府堺市西区家原寺町1丁1番1号

**TEL.072-272-1199**

<https://www.sakai-city-hospital.jp/>